

狭い石室に入り、自身の体をミイラ化し即身仏となる。霧島市にはそんな過酷な修行をした、3人の上人(徳の高い僧侶)の跡が残っています。

勝利を願った日秀上人

隼人町の朝日地区にある日秀神社は、戦国時代に活躍した日秀上人を祭る神社であり、もともとは日秀が建てた神照寺三光院という寺があった場所です。日秀は¹補陀落渡海²という修行を行い、琉球に流れ着いて奇跡的に生き残った高僧として有名です。琉球での寺建立の功績から、島津氏に請われて鹿児島に移ります。特に、戦国時代に戦火で焼けていた大隅正八幡宮(鹿児島神宮)の社殿再建に奔走しました。今も鹿児島神宮の裏山にある杉林は、将来の社殿建立を見越して日秀が屋久杉を植えたものです。

天正3(1575)年、日秀は島津義久が戦勝することを祈願して石室にこもり、天正5(1577)年に²入寂¹しています。入室の際には、義久から¹刀装

石室にこもった上人たち

具)をもらい受けています。日秀に關わる遺品は多く残されていて、隼人歴史民俗資料館に展示されています。

藩主にとどめられた空順上人

隼人公民館近くにある空順上人石室は、江戸時代に空順上人がこもった石室です。空順は寛文3(1663)年に大口で生まれ、若くから薩摩藩主の島津吉貴・継豊¹に仕えた僧です。空順は²祈禱¹によって災害を鎮めるなど、不思議な法力を持っていたといわれています。阿久根の町でたびたび火災が起きた時、空順が7日間無言断食の行を行い祈禱したところ、火事が起こらなくなつたそうです。そのため阿久根市では火事よけの信仰として、今でも消防車両に空順号と名付けています。

空順は62歳で石室に入室し、薩摩藩のために祈り続けるつもりであったよう¹で、石室は正徳元(1711)年に桜島で建立されています。何度か入室を願いましたが、藩主からとどまるよう¹言われ延期を繰り返します。その後、石室は現在の場所に移され、元文3(1738)年に入室したものと考えられて

います。藩主に何度もとどめられるほど、不思議な力と信頼を持っていった人物であったと思われ、地域の人に石室は今も管理され、信仰されています。

徳を慕われる真応上人

城山公園の麓に今も残るのが真応上人の石室です。もともとの場所には金剛寺という寺があり、その10代住職であったのが真応上人です。元和5(1619)年に鹿児島で生まれ、滋賀や京都、伊勢の寺で修業した後、金剛寺の住職を20年勤めます。元禄5(1692)年、74歳の時に三尺(約90¹センチ)四方の石室を造り、そこにこもって昼は読経、仏像の彫刻を行い、夜は念仏を唱えて祈る日々を送りました。石室に入室してから何年も過ごしていたため、その徳を慕って多くの人がお参りに訪れたといわれています。元禄11(1698)年に80歳で入寂しましたが、その後も地域の信仰を集め、現在では商売の神としても信仰されています。

祈禱・修行のために石室にこもった3人の上人たち。これほど近い場所に3人もの痕跡が残っているのは非常に

珍しいと思われます。

(文責 小水流)



真応上人石室



空順上人石室



日秀神社

※1 南にあると考えられた観音菩薩のいる地へ向かうため、海へ船出する宗教行為。ほとんど命を落とす行為とされている。
※2 僧が死ぬこと。